

外国人のみた日本 日本に対する私の印象（カルチャー・ショック）

著者	Bettadalli Chandrashekar Neelakanta, 梶山 貴史[訳]
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
雑誌名	アジ研ワールド・トレンド
巻	122
ページ	44-44
発行年	2005-11
出版者	日本貿易振興機構アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00005601

カルチャー・ショック 外国人のみた日本



Bettadalli Chandrashekar Neelakanta
出身地：インド・マイソール
所属：マイソール大学付属 JSS 女子大学経済学部教授
日本滞在：2005 年 5 月～8 月

日本に対する私の印象

ベッタダリ・チャンドヤシャカル・ニールカント

私は高校生の頃、社会科学の先生から日本について様々なことを教わったことを今でもはつきりと覚えている。インド南部のマイソールという町の大学に入学し、日本経済に関する新聞を読んだり、広島、長崎に相次いで投下された原子爆弾や、戦後日本の復興において多くのことを学んできたので、日本は私の人生で是非とも訪れたい国であった。幸いにも、日本で良く知られているアジア経済研究所で、海外客員研究員として勤務するという、非常に素晴らしい機会を得ることができたので、その喜びは計り知れない。私がその研究所から招待状を受け取ったまさにその日に、来日できるという私の大きな夢が実現することを改めて実感したのであった。

五月一〇日火曜日の午後三時四五分に成田国際空港に到着して以来、あらゆる物事が私にとってとはとても新鮮にみえた。私が最初に直面した問題は、言葉であった。私は日本語を一言も知らなかったためだ。大変な苦勞をしてまで何とか英語で話してくれる人もいたので、日本人はとてもフレンドリーな国民に感じられた。しかしここで研究する今となっては、私は日本語を一生懸命学ぼうと日々努力もしている。

しかし来日して二日目までは、私にとっ

て言葉はそれほど問題となることはなかった。私のカウンターパートである研究員が、研究所内を案内してくれたり、他の研究員の方々と他部署の職員も紹介してくれたため、私への対応はとても暖かく感じられた。その後、その研究員と研究交流課に所属しているもう一人の担当職員が、昼食時に研究所近くのインド料理店に案内してくれた。もちろんそこで出された料理は故郷の味がしたため、一時的にホームシックにかかってしまい、インドに残した家族を思い出してしまった。

そして三日目以降から、私の通常業務である研究が本格的に始まった。毎日私はJR総武線幕張本郷駅から、このアジア経済研究所のあるJR京葉線海浜幕張駅近くまで通勤することとなった。毎日私と同じように通勤する人々の多くは、近隣のオフィスに勤務しているように思われる。殆どの人々がスーツ姿にネクタイという格好で、彼らの服の着こなしは優れていた。私が海浜幕張駅行きのバスに乗る、幕張本郷駅前のバス停で、彼らが整然と並んでバスを待つ姿や、バスの中で静かに乗車している姿に、私はいつも感銘を受けてしまう。ここの人々は本当にきちんとしているが、たとえ彼らが英語を知っていても、私が英語で

話しかけると「分かりません」と英語で返ってきてしまうことが唯一残念なことだ。

但し、日本人に特に感心したことは、自然を愛し、自然保護に優れている点だ。日本では森林伐採による木材消費が現在もあるにもかかわらず、同時に森林保護にも努めてきたことは自慢できることだ。また、日本は都会や地方に関係なく、全ての人が現代技術を十分に活用できることも優れた点である。一方、インドはソフトウェア技術では既に世界的に先導的立場にあるが、全てのインド人がこの恩恵を受けているわけではない。この点でインドは、日本を模範とすべきだと私は強く主張したい。

更に日本の道路や公園、通りといったインフラの整備状況は、インドから来日した私にとっては、全く申し分がないほど立派に整えられている。この国はとても小さいけれども、今となつてはこの国が非常に気に入っている。あの第二次世界大戦でこの国は完全に崩壊したが、驚くほどのスピードで復興を遂げた。日本は今や、世界の中で超大国のうちのひとつとなっている。だから私は、日本人を本当の意味で尊敬している。私はこの日本という国に対して、今後の繁栄を願ってやまない。

(前海外客員研究員／訳 梶山貴史)